

スクーバダイビングインストラクターへの道のり



黒川 朋也 (PA会)

熱しやすく冷めやすいA B型の典型である私が、飽きもせず長らく続けている趣味がある。スクーバダイビングである。趣味が高じてインストラクターにまでなってしまったと言えば、その惚れ込みぶりを理解していただけるであろう。今回は、このすばらしきスクーバダイビングとの出会いからインストラクターになるまでの道のりをご紹介していこうと思う。本稿を通し、一人でも多くの方がスクーバダイビングに興味を持っていただければ望外の幸せある。

1. 水中世界との出会い (1994, GBR)

大学院で何とか修士論文を書き上げた私は、学生時代最後のひとときを、広大な珊瑚礁が広がるグレートバリアリーフ (GBR) で過ごそうという壮大な計画を立てていた。

一日中クルーザーで寝ころびながら読書をするなどという優雅なプランの似合わない私は、スクーバダイビングのライセンス取得、バンジージャンプ、熱帯雨林地帯へのツアーなど、ありとあらゆるアクティブプランを短い旅行日程の中に詰め込んでいた。せっかく海外に行くのであるから何でもやってやろうという貧乏根性のなせる技である。

まずはスクーバダイビングということで、ダイビングスクールに通い始めた私は、184m ノンストップスイミング、5分間立ち泳ぎなどの厳しい(?) プール実習を終え、念願の海洋実習へと出発した。GBRの海はとにかくすごかった。辺り一面自由奔放に広がるサンゴ礁、サンゴの隙間に見え隠れする愛らしい熱帯魚たち、我々ダイバーを親しい友達のように迎えてくれるナポレオンフィッシュ (体長1.5mほどの独特の体形を持つ魚)、どこまでも広がるクリアブルーの世界、正直言って、実習どころで

はなかった。このころから気になりだした体重の増加を忘れさせてくれた心地よい浮遊感も特筆すべきであろう。水中では、浮力の影響で、まるで空を飛んでいるような感覚になるのである。

2泊3日のすばらしき海洋実習を終え、無事にスクーバダイビングのライセンスを手にした私と友人の思惑は同じであった。以降の予定を全てキャンセルし、次のレベルの講習 (アドバンストコース) を受講すべく、再度2泊3日の海洋実習へと旅立った。

2. 修行時代 (1994~1997, 瀬戸内)

大手製鉄会社に就職した私は、大学で専攻していた計測・制御の研究を進めるべく、川崎にある研究所への配属を希望した。「配属希望はだいたい聞いてもらえるよ」という先輩の言葉を信じていた私は、川崎に居を構えて週末毎に伊豆にダイビングに行く自分の姿を頭に描き、ダイビング道具一式を買い込んだ。総計30万円、ボーナス一括払いである。しかし、運命のいたずらか、私の配属先は、川崎から約900km離れた広島県福山市の製鉄所であった。どうやら私の泥臭い顔が、研究所にはマッチしなかったらしい (同期のS君の弁)。

「赤潮に満ちた瀬戸内海では潜れないよ」と思いながらも、電話帳で探したダイビングショップを訪ねた私は、そこでKインストラクターと出会った。Kインストラクターは、レスキューコース (アドバンストコースの次のレベルの講習) の受講を希望する私に対して「上級ライセンスを取得しても、経験が伴わないと無駄だよ。もっと練習してから受講しなさい。」という予想外のコメントを放った。私は、その瞬間、「お客に向かって指図をするなんて、サービス業失格だな。」と思ったが、福山で他に頼る人もなく、仕方なくKインストラクターの指示に従った。

しかし、その後、Kインストラクターは、私のダイビング人生に大きな影響を与えた。

Kインストラクターは、安全確保について特に厳しかった。レスキューコースでは、水中に沈んだターゲット（溺れた人）の搜索を、成功するまで何度でもやらせた。おかげで、ターゲット役となった私は、何度も何度も海に沈むはめになった。その時は、溺れ役として最優秀主演男優賞をもらったが。。また、Kインストラクターの熱心さが受講生の我々にも伝わり、私の相棒は、海面でのマウス・トゥ・マウスの人工呼吸を練習する場面で、本当に私に接吻してきた。残念ながらその相棒は男だったが。。

一方、Kインストラクターは、遊ぶときは、自ら徹底的に楽しんだ。タコやヒラメの擬態を発見したり、まるでミニチュア版クリスマスツリーのようなイバラカンザシ（ゴカイの仲間）の生態を教えたり、水中で宝探しゲームをしたり、ナマコをカツラのように頭に付けて笑わせてくれたりと、私があれば悲観した瀬戸内海でのダイビングでさえ、知性と痴性に満ちた楽しいひとときの連続であった。

Kインストラクターのもとで、私は、ダイブマスターのライセンスを取得した。ダイブマスターは、インストラクターの監督の下で、ダイブツアーを統率することができる、いわゆる、プロフェッショナルなライセンスである。ダイブマスターとなった私は、ダイビングシーズンである初夏から晩秋にかけて、毎週のように、Kインストラクターと一緒にダイビングツアーに出かけた。

私がダイビング講習のアシスタントをした日の夜は、決まってKインストラクターとの反省会が行われた。

K：「今日の　　はどういうつもりだ！お客さんに何かあったらどうする。」

私：「すみません。。。」

K：「すみませんで済むか？あれほど言っただろ！」

私：「。。。 (泣)」

お客さんが隣の部屋で壁越しこの会話を聞いて

いて、翌日の朝食のときにお客さんに慰められたこともしばしばあった。

3. インストラクター試験（1998，土肥）

大手製鉄会社を退職し、東京に戻った私は、次の就職先である特許事務所に勤務する前の長期休暇（約1ヶ月）を利用して、インストラクター試験を受験しようと思った。転職は長期休暇を取得するいい機会になる。これだから転職はやめられない（だからといって、現在、具体的な転職プランがあるわけではない。現在勤務する事務所の所長も読むかもしれないので、念のためことわっておく）。

私がインストラクターになろうと思ったのは、Kインストラクターが実践していたように、ダイビングの楽しさを多くの人に伝えたかったし、また、Kインストラクターの厳しい指導により、インストラクターになるための素養が身に付いたと感じたからである。

約3週間にわたって行われたインストラクター試験準備コースを修了した私は、西伊豆の土肥で行われるインストラクター試験に臨んだ。ときは2月、海水温が最も低い時期である。寒さに震えながらも、無事、試験をクリアした。こうして、一人の新米インストラクターが誕生した。

以上、私のインストラクターへの道のりを紹介したが、上述のストーリーは98%程度がノンフィクション、残りの2%程度がフィクションであることをことわっておきたい。

* * *

スクーバダイビングは、きちんと基礎知識を習得し、スキルを身につけた上で行えば、決して危険なスポーツではない。老若男女、体力のあるなしにかかわらず誰もが楽しめるスポーツである。本稿を最後まで読んでいただいたことを機に、あなたもダイビングを始めてみてはいかがか。きっと、すばらしき水中世界に魅了されることであろう。